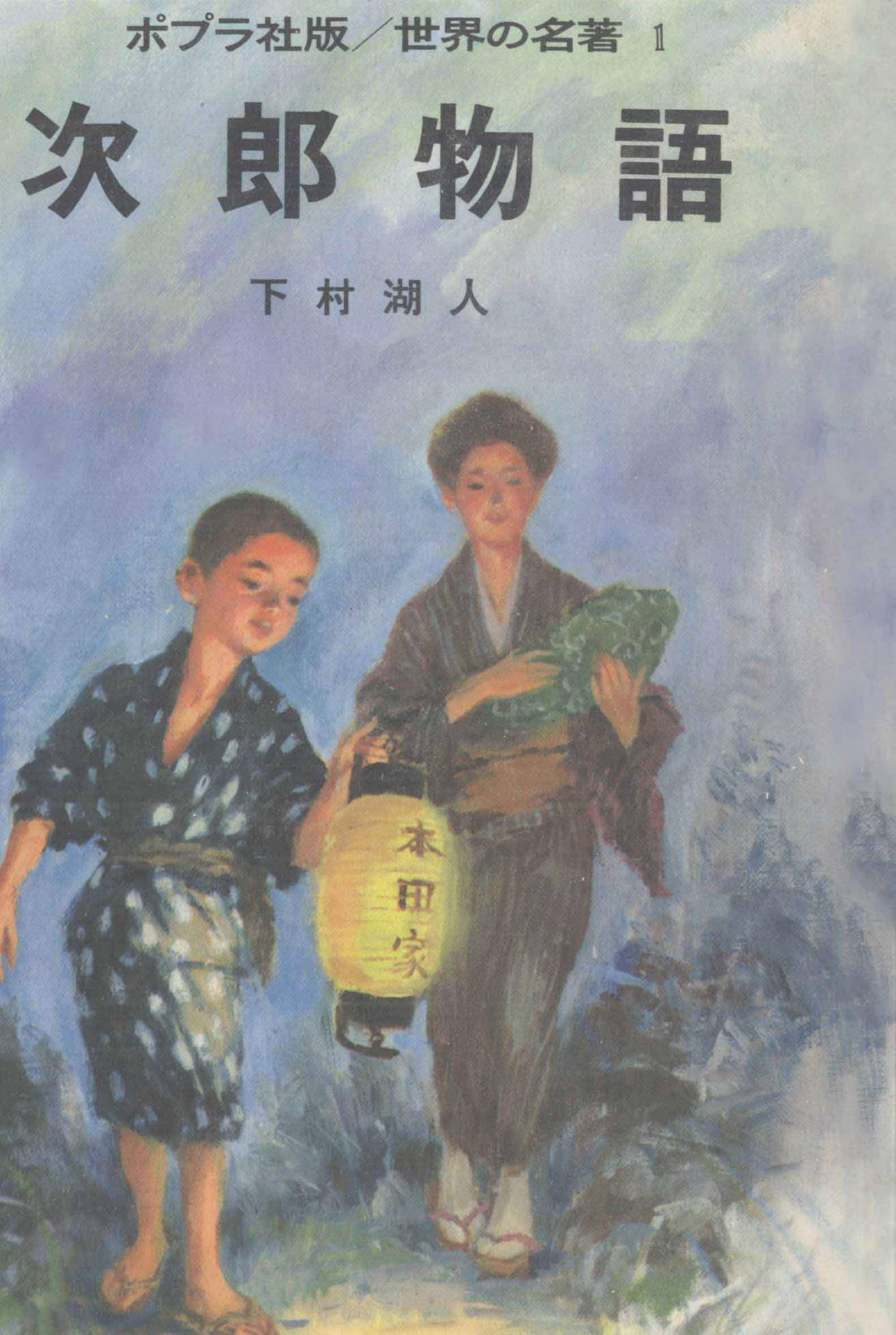
ポプラ社版／世界の名著 1

次郎物語

下村湖人

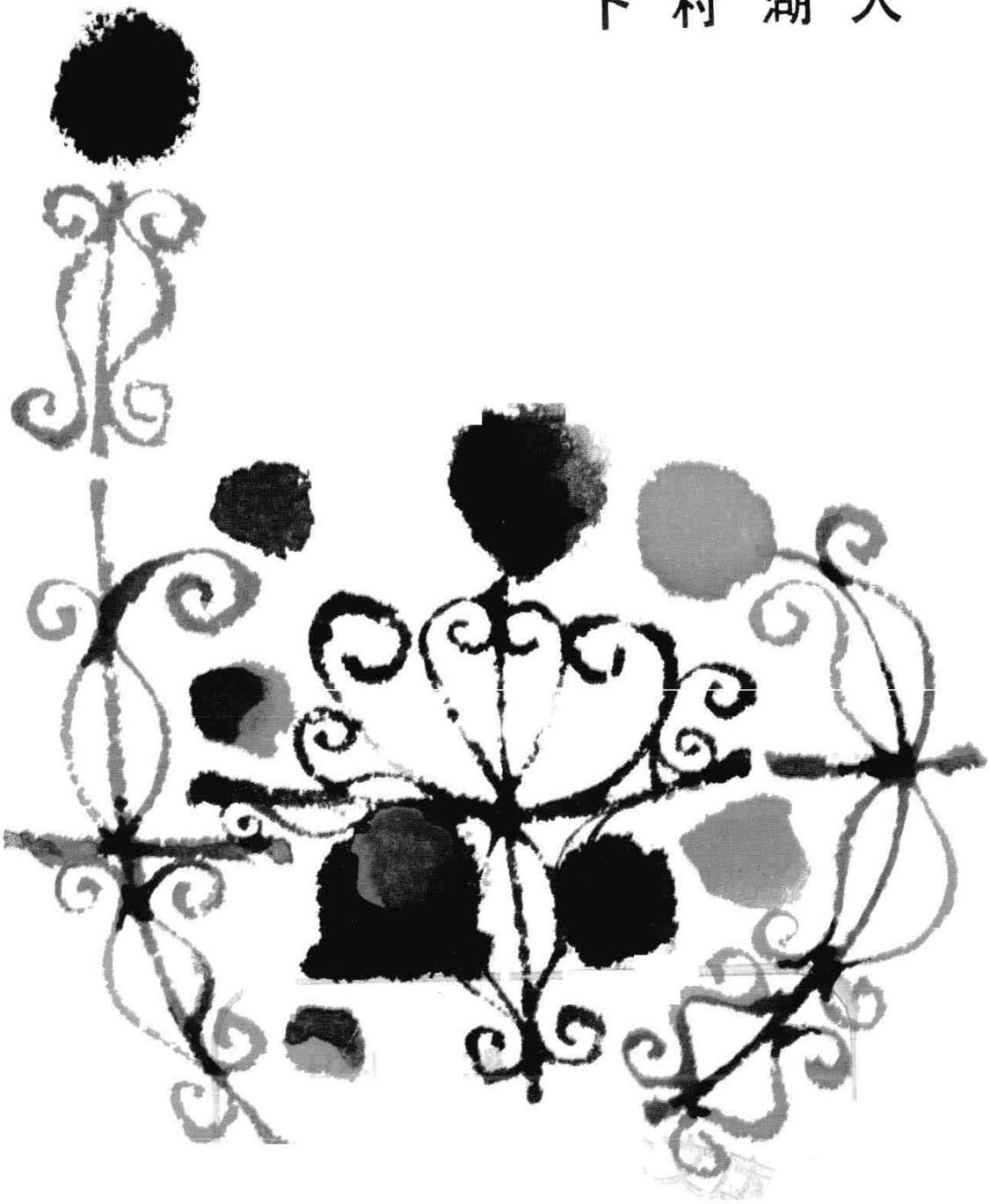


ポプラ社版／世界の名著

次郎物語

《第一部》

下村湖人



下村湖人
次郎物語
ポプラ社　昭和53（1978）
320p　23cm　（世界の名著　1）
〔分類〕913

著者略歴

1884年，佐賀県に生まれ，東京帝国大学文学科を卒業後，佐賀県立鹿島中学校長，台北高等学校長等を経て，大日本連合青年団講習所長，全日本青年産業振興会顧問等となる。1955年，70歳で没す。著書には，「下村湖人全集」のほか，「人生を語る」「真理に生きる」「論語物語」「青少年のために」「若き建設者」等多数がある。

世界の名著・1
次郎物語
著者・下村湖人（しもむらこじん）
発行・昭和42年5月20日　第1刷©
昭和53年7月30日　第25刷
発行者・久保田忠夫
発行所・株式会社　ポプラ社
東京都新宿区須賀町5　振替東京4-149271番
印刷・新興印刷製本株式会社
製本・島田製本株式会社

（落丁・乱丁本はいつでもお取り替えいたします）

もくじ

一　お猿さん……7
二　おたまじゃくし……14
三　耳たぶ……21
四　提灯……26
五　寝小便……38
六　飯びつ……42
七　たまご焼き……48
八　水泳……63
九　雑のう……69
一〇　お使い……75
一一　蠟小屋……82
一二　押し入れ……90
一三　窮鼠……100
一四　ちび……111
一五　地鶏……118
一六　土橋……123
一七　そろばん……130

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

一八　菓子折り……143
一九　校舎移転……150
二〇　旧校舎……157
二一　土台石……162
二二　カステラ……166
二三　いなごの首……175
二四　乱闘……179
二五　ねえちゃん……187
二六　没落……192
二七　長持ち……197
二八　売り立て……202
二九　北極星……208
三〇　十五夜……218
三一　新生活……227
三二　土蔵の窓……234
三三　看病……244
三四　牛肉……253

三五　薬局……261
三六　やけど……273
三七　母の顔……282
三八　再会……289
三九　母の臨終……298
あとがき……305
注……308
解説……群馬大学教授　日本社会教育学会会長　永杉喜輔……311

装てい　難波淳郎
箱絵　武部本一郎
さし絵　市川禎男

次郎物語（第一部）

下村湖人

一　お猿さん

「しゃくにさわるったら、ありゃしない。」

と、乳母のお浜が、台所の上がり框に腰をかけながらいう。

「まったくさ。いくら気がきついたって、奥さんもあんまりだよ。まるで人情というものをふみつけにしているんだもの。」

と、かまどの前で、あばた面をほてらしながら、お糸婆さんが、(1)のうべんに能弁にあいづちをうつ。

「お前たち、なにをいっているんだよ。」

と、そのとき、台所と茶の間を仕切る障子が、がらりとあいて、お民のかん高い声が、するどくふたりの耳をうつ。

お糸婆さんは、そしらぬ顔をする。お浜は、どうせやけくそだ、といったように、まともにお民の顔を見かえす。見かえされて、お民はいよいよきっとなる。

「お浜、あたしあれほど、ことをわけていっているのに、お前まだわからないのかい。恭一はなんといっても(2)総領なんだからね。どうせあの子を、そういつまでも、お前の家にあずけとくわけにはいかないじゃないか。」

「そんなこと、もうわかっていますわ。どうせご無理ごもっともでしょうからね。」
「お前なんということをおいいだい、わたしに向かって。……お前それですむと思うの。」
「すむかすまないかわかりませんわ。まるでだましうちにあったんですもの。」
「だましうちだって。」
「そうじゃございませんか。恭さんをちょっとつれてこいとおっしゃるから、つれて上がると、すぐにおばあさんにつれださしておいて、そのあとで、こんなお話なんですもの。」
「それで、お前すねたというのだね。」
「すねたくもなろうじゃありませんか。わたしにも人情っていうものがございますからね。」
「すると、恭一の代わりに、次郎をあずかるのは、どうしてもいやだとおいいなのかい。」
お浜はそっぽを向いてだまりこむ。
「なんというわからずやだろうね。わたしに乳がないばっかりにこうして頼んでいるのに、やさしくいえばつけあがってさ。……いやならいやでいいよ、もうお前にはどの子も頼まないから。その代わりこの家とはこれっきり縁を切るから、そうお思い。(3)飯米にこまるなんてまた泣きついてきたって知らないよ。恭一にだって、これからはどんなことがあっても会わせるこっちゃない。」
お民は、そういってぴしゃりと障子をしめた。
「奥さん、そりゃあんまりです。あんまりです。」
お浜はしめられた障子のそとでわめき立てた。
「なにがあんまりだよ。」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「あんまりですわ。やっと恭さんを一年あまりもお育てしたところを、だしぬけに、こんどの赤ちゃんのような、あんな……」

「あんな、なんだえ。」

と、また障子がからりとあく。

「……」

「はっきりおいい。」

「まあまあ、奥さん、わたしからお浜どんには、よういって聞かせましょうで……」

と、お糸婆さんが、やっとなだめにかかる。

「いって聞かせるもないもんだよ。年寄りのくせに、お浜にあいづちばかりうっていてさ。」

「へへへへ。」

お糸婆さんは、(1)お歯黒のはげた歯をむきだして、へんな笑いかたをする。

その時、奥のほうから赤ん坊の泣き声が聞こえた。お民は障子をしめながら、ふたりをぐっとねめつけておいて、そのほうに立っていく。

「どうせお前の思うとおりにゃなりっこないよ。あきらめたらどうだね。」

と、お糸婆さんはお浜に寄りそって小声でいった。

「やっぱりこんどの赤ちゃんをあずかるのさ。飯米のこともあるしね。」

「あたしゃ、飯米のことなんか、どうだっていいっていう気がするんだよ。」

「そりゃ、お前さんの今の気もちはそうだろうともさ。だけど飯米もふいになるし、恭さんにもこれから会

えないとなりゃ……」
「ほんとうに会わせない気だろうかね。」
「そりゃ、あの奥さんのことだもの。……お前さんもずいぶん勝ち気だが、奥さんにあっちゃかないっこないよ。こうきめたら、てこでも動くこっちゃないからね。」
「そのうちには、恭さんもわたしたちを忘れてしまうだろうね。」
「そりゃ、なんといってもね。……だから、やっぱり今のうちに、お前さんのほうでおれたほうがなにかとぐあいがいいんだよ。」
「でも、恭さんの代わりにあんな猿みたいな子をあずかるのかと思うと……」
「そんなことというのは、およし。聞こえたらどうする。」
「だって、ほんとうだろう。お前さん、そうは思わないかい。」
「それほどにも思わないよ。そりゃ恭さんとはくらべものにならないけれど。」
「恭さんは、そりゃ生まれた時から品があったよ。」
「こんどの赤ちゃんだって、そだてていりゃ、そのうちかわゆくなるさ。」
「あんなお猿さんみたいな顔でもかい。」
「およしったら。ほんとに聞こえたら知らないよ。」
「聞こえたら、聞こえたでかまわないさ。」
「でも、それじゃ、なにもかもだめになるじゃないかね。だいいち、恭さんにも一生あえなくなるよ。それでもいいのかい。」

「ああ、ああ、しゃくでも、やっぱりあずかることにしようかね。」
「そうおし、飯米のこともあるしね。」
「また飯米のことかい。よしておくれよ。あたしゃ、恭さんがかわいいばっかりに、あんな猿みたいな赤ちゃんでも、あずかってみようというんだよ。」
「おやおや、えらいご奮発だね。でも、あずかる気になってくれて、わたしも奥さんに申しわけが立つというわけさ、……どうれ、また気が変わらないうちに、奥さんに知らしてあげようか。」
お糸婆さんは、にたにた笑いながら奥にいった。そして、お民にさんざんかみつかれながらも、ともかくもうまく話をまとめた。
そこで次郎はその日から、恭一に代わって、お浜の家に里子にいくことになったわけなのである。
だが、お浜が次郎をいつまでもお猿さんあつかいにしてきらっていたかというと、そうではない。三－四か月もたつと、彼女の愛情は、もうすっかり恭一から次郎のほうへ移ってしまっていたのである。
お民は、次郎が次男坊なためか、あるいはお浜がいったように、じっさい猿みたいな顔をしていたためなのか、恭一をあずけていたころにくらべて、なにかにつけ冷淡だった。お浜にはそれがしゃくだった。そして、それがかえって彼女の次郎に対する愛着をます原因のひとつでもあったのである。
ある日、お浜は次郎の大きくなったのを、お民に見せたいと思って、しばらくぶりでやってきた。するといきなりこんな会話がはじまった。
お民――「おかげで、お猿さんもずいぶん大きくなったわね。」
お浜――「まあ、お猿さんですって？」

お民――「そういっちゃ、いけなかったのかい。」
お浜――「だって、ご自分のお子さまじゃございませんか。」
お民――「でも、お猿さんっていうのは、お前がつけてくれた名だっていうじゃないの。ちゃんとばあさんに聞いて知っているのよ。」
お浜――「あの時は、あの時ですわ。いつまでもそんな……」
お民――「すこしは人間らしい顔に見えてきたと、おいいなのかい。」
お浜――「奥さんたら、わたし、くやしいっ。」
お民――「おや、泣いているの、ついからかってみたくなったのだよ。すまなかったわね。」
お浜――「からかうのも、ことによりますわ。奥さんがそんなお気もちでしたら、わたしにも考えがあります。」

お浜は、ぷんぷん怒って、次郎を抱いて帰ってしまった。そして、それっきり、お民からなんど使いをやっても顔を見せなかったばかりか、月々の飯米さえ受け取りにこようとしなかった。で、とうとうお民のほうが根負けして、自分でお浜の家にでかけることになった。

こんどは、むろんお猿の話なんか、どちらからもでなかった。それどころか、お民はこんなことをいって、お浜の機嫌をとったのである。

「この子は八月十五夜のちょうど月の出に生まれたんだよ。だから、きっといまに偉くなると思うわ。」

お浜は、それですっかり気をよくした。そして、それ以来〈八月十五夜の月の出〉が、いつもふたりの話の種になった。話の種になっても、それはちっともふつごうではなかったのである。というのは、次郎の生

まれた時刻は、じっさいそのとおりだったのだから。

もっとも、その時刻に生まれたことが、はたして次郎にとって幸福であったかどうかは、うたがわしい。

それはおいおいと話していくうちにわかることである。

二　おたまじゃくし

次郎は、お浜の娘のお兼とお鶴とを相手に、地べたにむしろを敷いて、ままごと遊びをしている。場所は古ぼけた小学校の校庭だが、森閑として物音ひとつしない。周囲は、見わたすかぎり、黄金色の稲田である。午後の陽がぽかぽかとあたたかい。

この光景は、次郎の心に、おりおりよみがえってくる、もっとも古い記憶のひとつで、たぶん、彼の五歳ころのことだったろうと思われる。

お浜一家は、村の小学校の(6)校番をしていた。老夫婦にお浜夫婦、それにお兼とお鶴、つごう六人の家族が教員室のすぐ隣の、うす暗い畳敷きの部屋と、そのつぎの板の間とを自分たちの住み家にしていたのである。そしてそこへ割りこまされたのが次郎であった。

ぜんたい、恭一にせよ、次郎にせよ、なんでわざわざこんな家をえらんであずけられたのかというと、それは、母のお民が、子供の教育について、ひとかどの(7)見識家だったからである。彼女は、槍一筋の武士の娘であった。そして、おさないころから幾十回となく、(8)孟母三遷の教えというものを聞かされて、それになみなみならぬ感激をおぼえていた。で、自分に子供ができたら、機会を見つけてそれに似たようなことを実行してみたいと、かねて心に期していたのである。

こうした抱負を持った彼女にとって、お浜一家が学校のなかに寝起きしているということが、大きな魅力

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com